

に、触発感得あり。」と朱子学以前の儒教である五経に進むべき道を求め、著わした「持敬図説・原人」には「敬と云ふは、天命を畏れ徳性を尊ぶ之謂なり。」という先生の考えが書かれています。そして、藤樹書院を開いたときに、学則「藤樹規」に「天命を畏れ 尊徳性を尊ぶ 右、持敬の要、進脩の本なり」の言句を掲げました。

三十三歳。「孝経拝誦し、太乙神（万物原初の意味）天帝を祭る」「夏、孝経を読んで、愈々味深長なることを覚ふ。これより毎朝拝誦す。」朱子学の「格法」を打破する第一歩でした。その後、伊勢神宮に参ったのも「太乙神」を祭った勢いで、「格法」を破ったものと読むべきだと思います。

三十五歳。「先生近時専ら孝経を講明して、常に愛敬の二字を掲げ出して心体を体認せしむ。（中略）親を愛し、兄を敬するの心、且つ赤子を見て慈愛するの心のごときはいまだ滅せず。（中略）則ち聖人の心なり。」つまり、「聖人の心は“愛敬”」であるということです。愛敬は孝経の中にある言葉で、愛敬をもつてすれば人を恨まずに済むという世界に通用するものです。翁問答にも同様の言葉があり、愛敬を大切にしていたことがわかります。

三十七歳。「是年、始めて陽明全書を求め得たり。これを読んで甚だ

触発印証することの多きを悦ぶ。その学いよいよ進む。」とあります。友人に宛てた書簡に『陽明全集に出会わなかったら、自分はもう、何もせず死んだようなものだったが、それを助けてもらった。致知の知を良知と知って、悟ることができた。』と書いています。

三十九歳。奥さんが、次男鐘之助を里の亀山で出産後に体調を崩し亡くなります。しかし、論語述而に『憤悱（疑問を解決できない苛立ち）があつてこそ前に進めるのだ』とあるように、『自分には憤悱があつたから、これで先が明るくなったのだ』と友人への書簡に書いています。また、『青々とした深い淵に映えた月の影が波にも砕けない。勢い盛んな暴れ馬も手なずければ自在に乗りこなせるように、わたしも多少の苦難を乗り越えて、老いてようやく天衢に辿りつくことができた。』という意味の詩を詠んでいます。本名原に発した先生の道は、「天衢に出ずる」に至って、「天理に純にして、人欲の雑なき」聖人の心の境地まで行ったということでした。

結びです。儒教の目的は「修己治人」にあります。己の徳を修めて、一身をもつて万人の模範となり、家を齊え、国を治め、天下を平らかにすることです。目的は治人にあつて、修己はそのために求められるのです。先生は生涯を終える前に聖人

の心境になりましたが、聖人になる目的はその心を持つて人々に尽くすることであつて、新たな苦難の始まりでもありません。先生は大洲藩の家臣として郡奉行を務め、帰郷のために藩は辞しましたが、武士は辞めなかつたと思います。藤樹書院に学びに来る大洲藩士の子は、勉学を積んで仕官を果たし、武士として生きようとする者たちでした。彼らを先生が受け入れたのは自分が果たせなかつた治人の夢を彼らに託そうとしたのだと思います。

儒教の中心教義は論語でいう仁（人を愛すること）です。大学はそれをもつて明德とし、中庸は誠とし、孝経は愛敬とし、朱子は天理を、王陽明は良知をもつてそれぞれの大本としました。先生はその中から「愛敬」を自分の大本をとって選びました。私がそう思うのは中庸統解に「愛敬惺惺の心則ち万物を愛敬する処の心。万物を愛敬する処の心則ち治国の大基本なり」とあり、愛敬惺惺とは愛敬の道理を悟ることですが、その愛敬は本心の自然な顕われであつて、翁問答にもあるように人倫のすべてに感通して、平天下の基盤であるからです。

先生臨終の言葉である「この道の任」の真意は推測の域を出ませんが、一切の既成事物を撤去した更地の大地に愛敬に充塞された太平の世を築くことだつたのだらうと思います。

す。しかし、それは理想です。「この道の任」の道とは理想への道程であつて、日々の営為こそが大切なのです。先生が近江聖人と慕われているのは、愛敬をもつて人々に接し、足元を固めて着実に理想へと進む慈愛に溢れたリアリストであつたからだと思います。

たとえそれが苦難に満ちた道であつても一心に貫けば、実現できるという信念を書かれた書簡をもつて結びとしたいと思います。四十歳の夏に大洲の同志国領太郎右衛門に宛てられたものです。

「道を求むるは洛陽へ上るに譬え申し候。洛陽へ上る志をかたく立て定むれば、その道中、種々の難にあひ候といへども、ひたすらに上る道に懈怠なく、転べば起きて行き、起きてゆき、退屈なく候へば、終に洛陽に至るものに候。その如くに聖人に至らんと志をかたく立て、墮落しては提撕し改め、進脩に退屈なく候へば聖地に至るとなん」。

「この道の任、誰かあるか」という先生の呼びかけは、時空を超えて現代に生きる者に向けられたものだと我々は受け止めねばなりません。それぞれが自分の大本を立て、先生の呼びかけに応えることが重要です。先生に再び「嗚呼無し」と嘆かせてはなりません。

これをもつて終わらせていただきます。ありがとうございました。